

「上山城」からのたより 初春・第106便

旧上山藩士土田家所蔵馬術関係文書

上山城には今年度、旧上山藩士土田義覚（馬廻役）が江戸時代後期に収集した馬術関係文書（以下、土田家文書）が新たに収蔵されました。今回はこれらの文書から判明した興味深い事柄を二点ご紹介します。

①上山藩の馬術流派

江戸時代、上山藩では八條流馬術の稽古が行われていたと既刊の書籍には記されています。八條流とは大永〜天文年間（一五二一〜五五）に活躍した八條近江守房繁が開いた流派です。

しかし、土田家文書には八條流の教科書の他に同藩士細江彦惣が義覚に授与した高麗流八條家馬術（以下、高麗流）の目録（技術修得の免許状）が存在します。高麗流とは八條流の分派で、その名称の由来は、日本に馬術を伝えたのは朝鮮半島出身者だった。または、この分派は武蔵国高麗郡（現埼玉県入間郡周辺）で開かれたためなど諸説ありま



文久四年正月、岩淵加兵衛（仙台藩）が土田源次兵衛（義覚）に授与した高麗流馬術目録

す。細江彦惣は既刊の書籍中、上山藩の八條流師範として登場しますが、この目録から、八條流ではなく高麗流の師範であったことが判明します。また、土田家文書を読み込んでいくと、高麗流修得の過程で八條流の教科書が使用されていたことがわかります。高麗流を学ぶ義覚が八條流の教科書を所持していたのは、そのためだったといえます。

②土田義覚の馬術文書収集

大坂加番・仙台藩士との交流
土田家文書中には、義覚が入手経緯を詳しく書き込んだものが二冊あります。

一冊目は馬の飼育方法や馬体名称等を記した「飼馬必用 全」（文久元（一八六一）年初夏筆写）で、その末尾には「文久元辛酉初夏大坂於山里丸写之置もの也」

（文久元年初夏、大坂城山里丸で筆写）とあります。上山藩は万延元（一八六〇）年八月から一年間、「大坂加番」（大坂城警備（上山藩は同城山里丸警備））を勤めます。義覚は警備兵の一人として大坂城に赴き、そこで同書を筆写し上山へ持ち帰ってきたと考えられます。「大坂加番」に参加した藩士の余暇の過ごし方（まさか、勤務時間内に筆写してないだろうか…）を知ることがができます。

二冊目は日本・中国の歴史上の名馬の名が記された「和漢神駿録全」（文久四（一八六四）年正月筆写）で、その末尾には「文久四子歳正月日 仙藩御白楽半沢駒之助より借用拔書致置もの也」（文久四年正月、仙台藩半沢駒之助から借用し筆写）と記されています。当時、仙台藩では高麗流が盛んに行われており、同藩の同流派師範岩淵家に義覚が入りしっていたことも他の史料（掲載画像参照）から確認されます。書籍貸借・技術指導、馬術を紹介した仙台・上山両藩士の交流を知ることができます。

（公財）上山城郷土資料館
学芸員 長南伸治

【常設展示室から】今月から二階第三展示室に今回紹介した土田家文書を展示します。